



大阪+知的障害+地域+おもろい=創造

知の知の知の知

社会福祉法人大阪手をつなぐ育成会 社会政策研究所情報誌通算 4585 号 2018.8.31 発行

【インクルーシブ 共に生きる】文字盤の会話で生の実感 自閉症の作家・東田直樹さん (26) 産経新聞 2018年8月30日

東田直樹さんの歩み

平成	4年8月	千葉県で生まれる
	8年	筆談の練習を始める
	9年2月	幼稚園に入園
	10年3月	検査を受け「自閉傾向」と診断される
	11年4月	小学校の通常学級に入学
	12年~	パソコンを使い始める
		文字盤を使った会話もこの頃から始める
		作文コンクールで入賞が相次ぐ
	16年4月	養護学校の6年に編入
	9月	初の著書となる絵本「自閉というぼくの世界」(エスコアール)を出版
	19年2月	「自閉症の僕が跳びはねる理由」(同)を出版。以降、世界30カ国以上で翻訳された
	20年4月	通信制高校に入学
	23年3月	高校卒業。作家業に本腰を入れる



◎東田直樹さんの著書。左から「跳びはねる思考」「ありがとうは僕の耳にこだまする」(ともに角川文庫)



生まれつきの脳機能障害から、対人関係や会話に困難を

伴うこともある「自閉症」。26歳の作家、東田直樹さんは、重度の自閉症だが、声を出しながらオリジナルの文字盤をなぞって会話をし、詩やエッセーを書き、全国で講演も行う。これまで当事者の言葉であまり語られなかった自閉症のことを教えてほしいと、東田さんを訪ねた。(津川綾子)

インタビュー開始前、東田さんは、手元の文字盤を指でたたき「どうもありがとうございます」「僕は、すぐに失礼なことばかりするので」と言った。

その理由は、質問にきちんと答

えたい時も、思いとは別に体や口が勝手に動き、話の途中で席を離れたり、頭をよぎった別の言葉(例えば「三時のおやつ!」)が、口から飛び出してしまうことがあるから。東田さんはそんな自分のことを「操縦の難しいロボットの中にいるよう」と例える。

幼い頃、胸の中にはいつも出口のない気持ちと言葉が渦巻いていた。ドラマや漫画、周囲で起こっていること、先生や級友の言葉もたいてい理解できた。が、それを伝える言葉が出ないし、すんなり反応できなかった。だから、通常学級に在籍した小学5年頃までを著書で「暗い洞窟の中にいるよう」と書いた。当時の気持ちを問うと、1文字ずつ文字を指し、ゆっくり語り始めた。

「できることが少なく、僕は自分がだめな子だと思っていました」

「僕はいつも自分の脳と折り合うことができなくて、逃げたり、わめいたりしていました」。(立ち上がり、窓の外を眺めてまた席に戻り)「できないことがしたくないことだと思われたり、自分の意思でやっていると思われるのが僕にとっては嫌なことでした。おわり」

「きれいな言葉では言い表すことができないくらい、僕の心は荒(すさ)んでいました。おわり」

答えが一区切りつくと、東田さんは文字盤の「おわり」を指し、大声で「おわり」と言

う。しかし答えを待つと、気持ちを伝えてくれた。

文字盤を使った意思疎通は、東田さんが文字好きだったことから母・美紀さんが考案。小学2年の頃、厚紙に書いたひらがな五十音を指や鉛筆で指す練習から始め、やがて2学年上の姉が持ち帰ったローマ字表を先に東田さんが覚えると、文字盤もローマ字に。

東田さんは話そうとすると、言葉を見失いやすい特徴がある。ローマ字だとひらがなの約半分の26文字だから、1語目の文字をすばやく選択しやすいという。

人と話せなかった頃、「ごめんね、や、ありがとうの、ひとと言さえ言えたら、どんなに幸せかと、思っていました」。文字盤を使った会話を身につけた今、「(暗い洞窟の中ではなく)陸の上で生きている、という実感があります。文字盤で、自分の意思を伝えられるようになり、この世界にはさまざまな人がいること、自分は多くの人に支えられていることを知りました」と東田さん。

だから、言葉は大切に紡ぎたい。「僕にとっては、人と会話をする機会は限られています。だからできるだけ、美しい言葉を使うように心がけています」

まだ人と自由に話すことは難しいけれど、東田さんは詩やエッセーを通じ、大勢の読者と対話している。

〈晴れの日

雨がザーサー降ったあと
おてんと様が
顔をのぞかせる
みんなが笑う
僕も笑う
ただ それだけ
それが幸せ)

(『ありがとうは僕の耳にこだまする』角川文庫から)

かつて会話ができなかった東田さんは「友達」という自然から、勇気や生きる希望を教わったそうだ。今は、東田さんの詩が、私たちを励ましてくれる。

【用語解説】自閉症

発達障害の一つで、コミュニケーションや対人関係がうまくいかない、興味や関心が限定的などの特徴がある。知的障害を伴う人もいて、同じ自閉症でも、症状や障害の程度はさまざまだ。幼児期に「他の子に関心がない」「言葉が遅い」などをきっかけに気づく場合がある。

独自の作風 可能性 前橋で障害者アート展 4日まで 上毛新聞 2018年8月30日

ユニークな感性がにじむ作品の並ぶ会場



障害者によるアート作品展「群馬アールブリュット 夢の旅人たち展」が29日、前橋市元総社町のノイエス朝日で始まった。県内の支援施設で創作活動に取り組む作家ら15人による絵画や立体作品など約100点が並び、オリジナリティーのある作風が関心を集めている。4日まで。

芸術活動を後押ししている障害者支援施設のアトリエアート・オン、NPO法人の工房あかね(ともに高崎市、小柏桂子代表)が主催。主に高崎市内で障害者アートのグループ展や個展を開いてきたが、今年から開催地を増やした。

日本パラ陸上、高松市で9月1日開幕 2年後の「東京」へ熱き戦い

産経新聞 2018年8月30日



日本パラ陸上で選手宣誓をする田中司選手

国内における障害者競技の祭典「第29回日本パラ陸上競技選手権大会」が9月1、2日に高松市の屋島レクザムフィールドで開かれる。過去最多の選手が出場予定で、2年後に迫った東京パラリンピックを見据えて、白熱した戦いが期待される。

高松市などで行う実行委員会によると、24日までに306人（身体270人、知的36人）のパラ選手がエントリーしており、日本選手権として過去最大規模の大会になるという。

競技用車いす「レーサー」で400メートルと1500メートルの世界記録保持者、佐藤友祈選手（GROP SINCERITE WORLD-AC）や走り幅跳びでロンドン世界選手権銀メダルの前川楓選手（チームKAITEKI）、やり投げで日本記録に挑む田中司選手（三井住友海上、高松市出身）ら、東京パラを狙う有力選手が出場する予定となっている。

開会式は1日午前9時15分から、日本パラ陸上競技連盟の増田明美会長らのあいさつのもと、地元を代表して田中選手が選手宣誓を行う。

入場は無料。実行委では公共交通機関の利用を呼びかけているが、車での来場者に対して市立屋島小運動場に臨時駐車場を設け、シャトルバスの運行も行う。

高松市の大西秀人市長は記者会見で「東京パラを2年後に控えレベルの高い戦いが期待できる。（東京パラの）共生社会ホストタウンに登録されている市としても、障害者スポーツの素晴らしさをアピールできるまたとない機会。ぜひ足を運んでほしい」と話した。

パラ陸上 眼前で体感



読売新聞 2018年08月30日

大会に向けて走り込む芦田選手
事前合宿で練習に励む佐藤選手（いずれも屋島レクザムフィールドで）

◇1、2日 屋島で競技大会

◇リオ・メダリストら出場

リオデジャネイロ・パラリンピックのメダリストらが出場する「第29回日本パラ陸上競技選手権大会」が9月1、2両日、高松市屋島中町の屋島レクザムフィールドで行われる。四国での開催は初めてで、2020年の東京パラリンピックで活躍が期待されるトップ選手を見られる貴重な機会となる。（松本慎平）



大会は15年まで大阪府で開催していたが、各地に競技を普及し、関心を高めようと、16年は鳥取市、昨年は東京都が開かれた。高松市は昨年4月に同フィールドがオープンしたのに合わせ、大会を誘致した。

トラック、投てき、跳躍の3競技15種目が行われ、選手306人（24日現在）がエントリーした。

リオ・パラリンピック男子400、1500メートル（車いす）の銀メダリスト佐藤友祈選手（28）（WORLD-AC）は両種目などに出場。7月の関東パラ選手権両種目で世界新記録を出しており、今大会でも好記録が期待できる。

同フィールドでは、8月23日から日本パラ陸上競技連盟強化指定選手が事前合宿を行っており、佐藤選手も参加。「トラックの質感が硬くも軟らかくもなく、リズムカルにこげる」と感触を確かめ、「パラの大会はまだあまり知られていないので、より多くの人に見に来てもらいたい」と話していた。

右腕に障害がある芦田創選手（24）（トヨタ自動車）はリオの男子400メートルリレーで銅メダルを獲得。今大会は日本記録を保持する走り幅跳びに出場予定で『「障害がない』と思われるほどのパフォーマンスを見せたい』と意気込んでいた。

そのほか、リオの女子走り幅跳び4位入賞、中西麻耶選手（うちのう整形外科）や、高松市出身で同フィールドを練習拠点とする男子やり投げの田中司選手（23）（三井住友海上）らが出場する。

高松市は、東京五輪・パラでは「ホストタウン」に登録されており、台湾・パラ陸上チームの事前合宿誘致を進めている。大西秀人市長は今大会について「大会成功へ導き、障害者と接する心のバリアフリー化を進めたい」と話している。

大会の観戦は無料。両日とも競技は午前10時開始。問い合わせは大会実行委事務局（087・839・2626）。

「友好のブドウ」収穫に汗 青梅「自立センター」で障害者ら



東京新聞 2018年8月30日

「友好のブドウ」を収穫する参加者たち＝青梅市で

青梅市の姉妹都市・独ボッパルト市から贈られた「友好のブドウ」の収穫が二十九日、市自立センター（今井五）の農園などで行われ、センターを利用する障害者や家族、ボランティアの市民ら約八十人が汗を流した。山梨県内の蔵元で白ワインに加工され、来年一月ごろから「おうめワイン ボッパルトの雫（しずく）」の銘柄で市内の酒店などで販売される。

センターによると、今年は晴天が続いたこともあって豊作で、三カ所の農園の収穫量は計約三千キロ。昨年より約四百キロ多い。ボランティアの並木ヒロ子さん（75）は「ブドウの収穫は初めてで、とても楽しい」、持田千賀子さん（74）は「甘くておいしいワインになるのが楽しみ」と話した。

両市は一九六五年に姉妹都市となり、友好の証しとして七九年に青梅市はウメの苗木三百本、ボッパルト市は白ワイン用のブドウ「リースリング」の苗木三百本を互いに贈った。

センターは九八年度から白ワインに加工し、毎年二千本前後を販売している。さわやかな甘さが特徴という。（服部展和）

調教馬用ゼッケンで再生バッグ 新商品2種類、好調 中日新聞 2018年8月30日

調教馬に使用后、本来なら廃棄されるはずのゼッケンを引き取ってバッグなどを製作、販売しているブランド「s t e e d（スティード）」が、新たに二種類のバッグを発売した。オンラインショッピングではすでに品薄になるなど、好調な「出足」となっている。



スティードは秀でた競走馬「優駿（ゆうしゅん）」の意味。守山市水保町の聴覚障害者施設「びわこみみの里」が、縫製業者らと連携してデザインや縫製、販売などを担当している。材料となる調教馬用ゼッケンは、日本中央競馬会（JRA）栗東トレーニングセンター（栗東トレセン）から譲り受けた。丈夫さや軽さ、洗える手軽さなどが売りで、収益は作業する障害者に給料として支払ってきた。

s t e e dから新発売されたバッグ「ハロン」。手前の小さなバッグは「メン」＝守山市水保町の「びわこみみの里」で

新商品は、小さめのバッグインバッグ「メン」と、荷物の多い人向けのショルダーバッグ「ハロン」。日本語でたてがみを意味す

る「メン」（税込み五千四百円）は縦十八センチ、横二十三センチで、持ちやすいサイズ感と価格帯が魅力だ。一方、一枚のゼッケンを一切裁断せずに作った「ハロン」（同一万三千四百四十円）は、縦四十八センチ、横四十一センチと大きめ。値段は張るが、販売開始から一カ月足らずで、すでにスティードの「一番人気」となっている。

人気の理由は、用いた「白黒ゼッケン」の希少さにある。調教馬のゼッケンは、入厩（にゅうきゅう）先のトレセンや馬齢によって異なり、全六種類ある。栗東トレセンでは、二歳馬は緑地に白字、三歳だと黒地に白字のゼッケンを着ける。四歳以上になれば白地に黒字のゼッケンを与えられるが、レース成績の不振やけがなどから、白黒ゼッケンを着用できる馬は全体の一部。汚れが少ないなど、商品として利用できるものは、さらに一握りだ。

栗東トレセンで4歳以上の調教馬が身に着けるゼッケン。ハロンの材料で、一切裁断せずにバッグになる＝守山市水保町の「びわこみみの里」で

そのため、バッグによっては、G1や重賞の勝ち馬の使用済みゼッケンを使っている可能性もある。こうした理由から、全国の競馬ファンから注文が相次いでいるという。

同施設支援員の松岡幸子さん（61）いわく、「品切れになったら、十分な量の白黒ゼッケンが確保できるまで、一～二年は販売されないかも」。購入が、障害者の支援やリサイクルにつながるのも、うれしい点だ。普段のお出かけで身にまとい、周りの馬好きに三馬身ほど、差をつけてみては？（高田みのり）



関西芸術座 「トミーの夕陽」 自閉症の青年と母親の日常 毎日新聞 2018年8月30日

関西芸術座「トミーの夕陽」に出演する芳本亘世（右）と梅田千絵＝畑津江撮影

自閉症の青年とその母の日常を描く関西芸術座の新作「トミーの夕陽」が、9月7～9日、大阪・ABCホールで上演される。5回公演。

原作は、山田洋次監督の映画「学校3」の原作にもなった鶴島緋沙子による同名の半自伝的小説。脚色は宮地仙、演出は門田裕。

介護職 PR ビデオにご当地ヒーロー 撮影佳境 種子島 南日本新聞 2018年8月30日

特別養護老人ホーム「南界園」を舞台にタネガシマンが出演する介護職 PR ビデオの撮影現場＝中種子町田島



種子島のご当地ヒーロー「離島閃隊（しえんたい）タネガシマン」が出演する介護職PRビデオの撮影が10月中の完成を目指し、佳境を迎えている。ヒーローものと介護の奥深い世界を融合させ、説得力あるストーリーをいかにつくり出すか。制作を担当する種子島アクションクラブ（TAC）は初の経験に苦闘している。

県熊毛支庁保健福祉環境部の有村智明部長が昨年、島の子どもに知名度があるタネガシマンを通して介護職の魅力ややりがいを伝えてほしい、と制作を依頼した。

TACは新ヒーロー「地域介護士ケア☆スターくまげ」を設定。中種子町田島の特別養護老人ホーム南界園を主舞台に昨年末、撮影を始めた。

3年連続で定員割れ続廃合...勝山高と桃谷高の一部で新設校 大阪府教委、府市立8校も募集停止

産経新聞 2018年8月30日

大阪府教育委員会は30日の教育委員会議で、定員割れが続いて再編整備の対象となっていた勝山高（大阪市生野区）と、施設の収容能力上の課題から募集定員を拡充できなかった桃谷高（同）の多部制単位制I部・II部を統合する方針を固めた。新設校は勝山高の校舎を使用し、平成32（2020）年度に開校予定。今年11月の会議で最終決定される見通し。

■募集停止すでに8校

松井一郎知事が橋下徹前知事から継承した教育改革の一環として、3年連続で定員割れし、改善の見込みがない高校を再編整備の対象にすると定めた府立学校条例などに基づく措置。

松井一郎氏、橋下徹氏、吉村洋文氏と大阪湾の人工島・夢洲（ゆめしま）



勝山高は28年度以降3年連続で定員割れ。生徒の主な居住地は同市生野区や平野区だが、この地域の中学卒業生数は今後減少する見通し。志願者数の改善が見込めないと判断された。

桃谷高は日中に学ぶ多部制単位制I部・II部と、夜間に学ぶIII部に加え、通信制の課程（昼間部・日夜間部）がある。通信制の昼間部の志願倍率は高いが、I部・II部と活動時間が重なり、教室の数に限界があることから、定員の拡充ができない状況だった。統合により残った通信制の昼間部の定員は拡充し、III部は夜間定時制とする。

一連の教育改革では、同条例や現行の再編整備計画（26～30年度）に基づいてこれまでに8校の募集停止が決定。池田北高と咲洲高はすでに閉校し、西淀川高と大正高が募集停止中。柏原東高と長野北高は来春の入試から募集を停止し、大阪市立西高と南高の募集停止も決まっている。

会議ではこのほか、将来の生徒数の減少を見据え、来年度からの5年間で府立高と大阪市立高の8校程度を新たに募集停止とすることなどを盛り込んだ再編整備計画案も了承された。

厚労省の概算要求、過去最大に 社会保障費29兆円 西村圭史

朝日新聞 2018年8月30日

厚生労働省が29日に公表した2019年度予算案の概算要求額は、一般会計の総額が31兆8956億円で過去最大になった。18年度当初予算からは2・5%、7694億円増えた。高齢化が進む影響で医療や介護、年金などの社会保障費が膨らみ、29兆8241億円に上った。

社会保障費の内訳は、年金関連が18年度当初予算から1600億円増の11兆8千億円、医療関連は同2400億円増の11兆7千億円、介護関連は同1100億円増の3兆円。障害者政策関連も1兆6千億円で1100億円増の要求となった。社会保障費のうち、高齢化が進んだことに伴い、厚労省が増やした額は6179億円だが、財務省はこれをなるべく抑えたい考えで、年末にかけて議論される見通しだ。

福祉関連の要求は、雇用情勢の改善や少子化の影響で生活保護や児童扶養手当などが減り、100億円減の1兆7千億円だった。

社説：障害者雇用不正 「共生社会」掛け声だけか 西日本新聞 2018年08月30日

この数字には、あきれられるほかない。不正の実態は思った以上に深刻だった。「共生」をうたった障害者基本法は空文化し、安倍晋三政権が掲げる「1億総活躍社会」も掛け声だけに終わっていないか。政府には改めて猛省と原因の究明、再発防止の徹底を求めたい。

中央省庁による障害者雇用の水増し問題で、政府は不正が33機関中27機関に及び、昨年雇用したとされる約6900人のうち、3460人が水増し算入されていた、と発表した。

簡単に言えば、中央省庁の8割で不正が行われ、実際に雇用された障害者は公表された数字の半数以下、法定基準（公表当時は2・3%）を上回っていたという雇用率「2・49%」も、実際は「1・19%」で、大うそだった—という構図である。

省庁別では、水増し数が国税庁で千人超、国土交通省や法務省で500人超などと、実際の雇用率が法定基準を大きく下回り1%未満の機関も多かった。

政府は原因について「故意か誤解に基づくものか、今の段階で判断するのは困難」（加藤勝信厚生労働相）としている。

しかし、これまでの報道では「障害者手帳を持つ人」と「指定医の診断で障害が認められた人」に限定された国の雇用ガイドラインを、大きく逸脱した運用が次々に浮かんでくる。

「健康診断結果を基に本人に確認せずに算入した」（国交省）「本人が書いた健康状態や病名を基に判断した」（法務省）といった事例だ。これらの中には、障害者手帳を持たない糖尿病やがんの人を含めたケースもあるようだ。多くの省庁が長年、ノルマ達成のために、ガイドラインを意図的に拡大解釈していた疑いが強い。

政府は問題の検証作業とともに、障害者の新たな雇用枠を早急に設けるべきだ。

気掛かりなのは、障害者を「共に社会で働く仲間」として尊重する意識が、霞が関で欠落していないか、という点だ。国の障害者施策の基本理念を確認しておきたい。

「全ての国民が障害の有無によって分け隔てられることなく相互に人格と個性を尊重し合いながら共生する社会の実現」

障害者基本法の第1条で規定され、今年の障害者白書でも「職業を通じた社会参加が重要」と強調されている。安倍政権の「1億総活躍社会」も、これを包含したスローガンである。

2年後には東京五輪・パラリンピックが控える。そこでは、日本が国際社会に向かって平和の尊さや「共生社会」の素晴らしさを発信する役割を担う。その使命も見据え、政府全体として意識改革を進めるべきだ。

論説：【共に暮らしやすく】条例を幅広く生かす 福島民報 2018年8月30日

県は障害を理由とする差別の解消などを掲げる条例づくりに取り掛かっている。県民の意見を聞くパブリックコメントを九月中旬に始め、年内に県議会への提案を見込む。

条例の効果を高めるには福祉や教育とともに、働き方、まちづくり、消費生活、防災、防犯、司法、選挙などの幅広い分野にわたって、行政も民間も制度や慣行を総点検する必要がある。

県は障害を漢字で表す際に、法令でやむを得ない場合を除いて、できる限り「障がい」を用いる。条例の仮称には「障がいのある人もない人も共に暮らしやすい福島県づくり条例」を挙げた。同時に、手話の普及を目的とした県手話言語条例も定める。

県によると、二〇一七（平成二十九）年度に県内で身体、知的、精神の各障害に関する手帳を持つ人は合わせて約十一万三千人だった。障害のある人の範囲は国の制度改正や医学研究によって、今後も見直されるとみられる。障害の特性や年齢、暮らしの様子、地域の実情を踏まえながら、分け隔てのない支援の在り方を探してほしい。

障害者差別解消法は二〇一六年四月に本格施行された。県は法律よりも踏み込んだ施策

を進めるために、条例に「横出し」や「上乗せ」と呼ばれる手法を用いる。具体的には(1)法律は不当な差別的取り扱いを禁止する対象として、行政機関と事業者を挙げるが、条例は「何人も」に広げる(2)法律は事業者に指導や勧告をできるが、条例は勧告に従わない場合に公表も可能とする一を盛り込む予定だ。

障害者雇用の水増しが国の機関で発覚し、その後に本県を含む地方でも明るみに出た。県は条例の中で、障害のある人が能力に合った職業に就けるように、多様な就労の機会を確保する考え方の条文を検討している。行政は住民や企業の模範となる立場であり、雇い方や働き方の早急な改善が欠かせない。同時に、国、県、市町村の施策や制度を見渡し、障害者にとっての障壁がないかを普段から確かめなければならない。

二年後の八月から九月にかけて東京パラリンピックが開かれる。本宮市と飯舘村は参加国の選手らと交流するホストタウン事業を計画する。また、県障がい者スポーツ協会は、活躍が期待される選手を「ふくしまパラアスリート」に指定している。車いすラグビー日本代表の合宿が県内で行われ、他の競技の合宿も今後、予定されている。条例を広め、生かす機会の一つにパラリンピックと五輪を位置付けるべきだ。(安田信二)

社説 児童虐待が13万件超える 救出と共にケアの拡充も

毎日新聞 2018年8月31日

2017年度に児童相談所が対応した虐待は13万3778件(速報値)で、過去最多を更新した。統計を始めた1990年度から27年連続の増加だ。

政府は緊急対策として、児童相談所で働く児童福祉司を22年度までに約2000人増員し、子どもの安全が確認できない場合には強制的な立ち入り調査をルール化することなどを打ち出している。

虐待防止や救出に努めるのは当然だ。同時に子どものケアや安心できる環境の確保も急ぐべきである。

厚生労働省の別の調査では、虐待で病院に1カ月以上入院した子どものうち、治療が終わっても退院できなかった子が年間63人に上ったという。受け入れ施設に空きがないことが主な理由だ。治療後も1年以上病院内にとどまっていた子もいる。

親との接触を避けるため、病院から出られないケースも多く、子どもの発育にマイナスの影響を与えることが指摘されている。

一方、児童養護施設は集団生活によるストレスもあって子ども同士の暴力や性的虐待が各地で起きている。虐待された子が保護された施設でさらに傷つけられる、という事態は早急に改善すべきである。

厚労省は施設よりも家庭的な環境の中で傷ついた子どもの養育を進める方針を掲げている。里親の登録者数も増えている。そうした流れは評価したい。だが、子どもが被虐待のトラウマから暴力や暴言をすることがあり、里親が育てきれなくなって施設に戻る子も少なくない。

本来は委託する側の児童相談所に里親や養親を支援する責務があるが、人手不足で十分な活動ができていないのが実情だ。せつかく里親や養親となってもうまくいかず、児童相談所はますます委託するのに慎重になるという悪循環を生んでいる。

17年度の虐待対応の中では、配偶者への暴力で子どもがストレスを受ける「面前DV」などの心理的虐待が全体の54%を占めた。子どもの心に深い傷を残し、さまざまな問題行動を引き起こす原因とされる。

児童相談所と養護施設や里親が連携し、傷ついた子を手厚くケアできる居場所を拡充していかねばならない。専門職の増員も含め、政府による一層の支援が必要だ。



月刊情報誌「太陽の子」、隔月本人新聞「青空新聞」、社内誌「つなぐちゃんベクトル」、ネット情報「たまにブログ」も
大阪市天王寺区生玉前町5-33 社会福祉法人大阪手をつなぐ育成会 社会政策研究所発行